

大学における社会正義のための教育の授業開発 —マイクロアグレッションを例にして—

青木 香代子*

(2022年11月8日受理)

Developing Lesson Plans of Social Justice Education in Higher Education: Overcoming Microaggression

Kayoko AOKI*

(Received November 8, 2022)

Abstract

Microaggression can happen to anyone in daily life including at a university class. In this article, the author examines the theoretical background of microaggression which anyone can be a victim or victimizer, from a perspective of social justice education. The author also discusses lesson plans of practicing social justice education which encourage students to recognize microaggression and other related topics such as bias, discrimination, and privilege.

【キーワード】 マイクロアグレッション、社会正義のための教育、microaggression、
social justice education

1. はじめに一授業で起こったマイクロアグレッション

2021年12月、筆者が担当していた授業「多文化共生」は、オンライン双方向型の授業として行っており、日本の学生27名と、当時新型コロナウイルスの影響により来日できず遠隔で授業を受けていた交換留学生2名が受講していた。この授業は、主に1年生を対象とした基盤教育科目で、多文化社会日本の現状と課題について考え、多文化共生社会をめざすための資質の基礎を養うことを目的としている。日本社会の多様化・多文化が進むなか、多様な背景を持つ人と共により平等で公正な社会を目指すための知識・スキル、態度を身に付けるため、この授業では文化とは何かといったことや、ステレオタイプや偏見、差別や日本人としての特権性等について学ぶ。

2021年度の第1回目の授業では、アイデンティティの多層性・複層性について話した後、多様

*茨城大学全学教育機構 (Institute for Liberal Arts Education, Ibaraki University)

な背景を持つ人のアイデンティティのケースについて、ブレイクアウトルーム機能を使ってランダムに4人～5人に振り分けたグループでグループディスカッション¹⁾を行った。このアクティビティは授業の後半に行ったが、それまでに1, 2度、この授業を受けている人の中に留学生がいることに触れ、ブレイクアウトルームに入る前に、自己紹介をしてからディスカッションを進めるように指示した。しかし、留学生1名を含んだあるグループで、他の日本人学生が留学生に話しかけないまま、自己紹介の時も、ディスカッションのテーマについても話しかけることなく、無視した状態でグループディスカッションの時間が終わってしまったということを、授業終了後に留学生本人から聞かされた。

本授業では毎回グループディスカッションを取り入れており、2回目からは事前にディスカッションを行う内容について事前に課題を提出してもらうようにしている。ディスカッションを行うグループもこちらで指定し、ファシリテーターとなる人をあらかじめ決めて始めるように指示していた。しかし初回は深く議論するテーマではなかったため、自己紹介をすること以外に進め方等の指示は出していなかった。初回ということもあり、授業の雰囲気になれるということも考慮してのことであったが、ブレイクアウトルームの様子をすべて見ることもできなかったため、実際に当該のグループがどのような様子であったかを筆者自身が確かめられたわけではない。とはいえ、留学生本人から議論に参加できなかったという話を聞き、大変ショックを受けたと同時に、留学生に対して申し訳ない気持ちであった。また、これ以上このようなことはあってはならないと考え、第2回目の授業内容を少し変更し、授業の冒頭で1回目の授業で起こったことがマイクロアグレッション（日常で起こりうる分かりにくい侮辱行為や無視。詳細は後述）であったこと、マイクロアグレッションは、行為者にその意図がなくても起こってしまうこと等について説明した。2回目以降の授業からはグループを変えたものの、マイクロアグレッションが起こった背景については深く掘り下げることができなかった。

すでに述べたように、この授業で筆者は、多文化共生とは何かということを批判的に捉えることができるよう、差別や偏見について、全8回の授業のうち、2～3回に分けて取り上げるとともに、多様な背景を持つ子どもに対する教育や地域での取り組み等を含め、様々な側面から多文化共生について考えることを心掛けてきた。そのため、自分が担当する授業で差別が起きてしまうとは思ってもみなかった。しかし現実には、上記のような差別が起こってしまった。おそらく留学生と同じグループにいた日本人学生は、差別するつもりはなかったであろうし、その行為について、差別だと指摘されるとも思わなかったかもしれない。一方で、この出来事は留学生が話してくれなければわからなかったことであり、これまでも同様のことが起きていた可能性がある。今回は授業後にこの留学生との授業が続いていたこともあり、すぐにこの一件について筆者の知るところとなっただけで、このような学生同士のやり取りで起こった出来事について、被害を受けた学生が申し出てくることはほとんどないのではないかと。

さらに考えなくてはいけないことは、このようなわかりにくい差別は、授業に参加している学生同士だけでなく、教師がそれとわからずにしてしまう可能性があるということである。教師は、留学生に限らず、国籍や言語、海外ルーツを持つ人、性的マイノリティや合理的配慮の必要な学生等、様々な背景を持つ人が安心して授業を受けられるようにすることが求められる。マイクロアグレッションをはじめとする差別は、授業の外だけでなく（あるいは学外よりもむしろ）授業内で起こることも十分にあり得るからである。このような差別をなくしていくための知識やスキルを涵養する授業実践の開発が必要である。そこで本稿では、マイクロアグレッションをはじめとする様々な形

の差別や抑圧に対抗するための知識やスキルを身につけることを支援する社会正義のための教育における理論をもとに、「多文化共生」の授業開発を試みる。なお、本稿では、主に人種および国籍をめぐるマイクロアグレッションに焦点を当てて、それらに関する議論を検討する。

2. 本研究の理論的枠組み—社会正義のための教育の視点から

本節では、差別が生まれる抑圧構造を批判的に捉える視点として、社会正義のための教育 (social justice education)²⁾ の理論において重要な論点である抑圧構造及び特権性について検討する。社会正義のための教育は、歴史的・社会的・文化的に維持されてきた抑圧構造を批判的に分析し、それに対して行動していくための知識やスキルを身につけることを支援するものである (Bell, 2016)。社会正義のための教育では、人種³⁾、ジェンダー、社会経済的階級、性的指向等の社会的カテゴリーにおける周縁化された人々 (いわゆるマイノリティ) と、特権的あるいは支配的集団に属する人々 (いわゆるマジョリティ) との間における抑圧とそれが生まれる構造について批判的に分析し、それに対して行動を起こしていくための知識とスキルを身に着けることを支援する。

抑圧構造は、社会制度や法律、教育等に埋め込まれており、様々な形の差別、表象やマイクロアグレッション等によってマジョリティとマイノリティの関係が維持されている (Bell, 2016)。ここでいうマジョリティは、数が多い「多数派」という意味よりもむしろ、より権力を持つ側、特権を持つ側を意味する。例えば国籍のカテゴリーでは、日本では日本国籍を持つ人はマジョリティ、そうでない人はマイノリティとされる。マジョリティが持つ特権性とは、ある社会的カテゴリーにおいてマジョリティ性を持つ集団に属することで「労せずを得られる優位性」とであると定義される (McIntosh, 1989: 2011; 出口, 2021)。多くの場合、マジョリティは自らが持つ特権性には無自覚である。人種という社会的カテゴリーで見ると、アメリカ合衆国 (以下、アメリカ) における白人がどのような特権を持っているかについて考察したマッキントッシュ (McIntosh, 1989: 2011) は、日常生活に見られる特権として次のようなものを挙げている。

- ・ 引越しするとき、購入可能で自分が住みたいところの住居を購入・賃貸できる。
- ・ テレビ・新聞等に自分と同じ人種の人々を見ることができる。
- ・ スーパーで自分の文化の食料が買えたり、美容室に行って自分の髪を切ってくれる人を見つけることができる。
- ・ 子どもたちは自分の人種が存在を証明するカリキュラム教材を使うことができる。
- ・ 自分の人種を代表して話してくれと言われることはない。
- ・ 部外者としてみなされることなく政府の政策を批判することができる。

(McIntosh, 1989: 2011, pp.122-123 一部抜粋して筆者訳)

これらの例からもわかるように、特権とはマジョリティに属していることで、普段意識せずにできていたり、しなくて済んだりすることであり、それが「労せずを得られる優位性」として実践されることを指す。日本では、特権といえば「学割が使えるのは学生の特権」「お酒が飲めるのは大人の特権」といった使い方をすることが多いが、これは「『一時的』な立場・役割で自動的に恩恵を受ける」(出口, 2021: 74) という意味合いで使われることが多い。社会正義のための教育の文脈で使われる特権性の特徴は、原則として努力によって得たものではなく、マジョリティ性を持った側に属していることで意識せずとも開く透明の自動ドアのようなものである (出口, 2021)。そ

のため、マジョリティは、特権性は無自覚なまま、マイノリティの人たちに日々接している。つまり、マイノリティに属する人々が日常で経験する差別は、特権性は無自覚なマジョリティと接するなかで受ける場合が多いといえることができる。

むろん、差別は様々な形、様々なレベルで現れる。人種差別を例にとってみると、人種差別には個人間・対人間の差別、制度的差別、社会的・文化的差別等がある (Bell et al., 2016)。個人間・対人間の差別は、個人の先入観や偏見によるもので、意識的に悪意をもってなされるものと、無意識的になされるものがある。制度的差別とは、政策や法律、社会的機関、医療、雇用等における差別をさす。社会的・文化的差別は、社会的規範や習慣、言語、善悪や美の価値観、表象等に現れるもののことである (Bell et al., 2016: 134-135)。文化的人種差別は、個人的差別・制度的差別を温存させる有害な形態のレイシズムであるとスー (2020) は指摘している。なぜなら、特定の集団の文化遺産 (芸術や歴史、言語等) をほかの集団よりも優れているとし、その基準をほかの集団に押し付けるものであるからだ。

近年、アメリカでは特定の集団に対するヘイトクライムを禁止する法律ができたこともあり、ヘイトクライムやヘイトスピーチ、露骨な差別表現は処罰の対象となり、行為者は非難されるという認識が広がっている⁴⁾。しかし同時に、人種差別は「目に見えない、形容しづらい、そしてより遠回しなものになってきており、意識レベルよりも深いところで作用しながら、見えにくい形で人々を圧迫するもの」になってきていると指摘されている (スー、2020: 39)。なかでも、無意識になされる差別として人種的マイクロアグレッションと似ているとされるのが「回避的レイシズム」⁵⁾である。回避的レイシズムの行為者となる多くのマジョリティ (この場合白人) は、自分は人種的偏見を持っておらず、平等主義を信奉しているため、けっして故意に人種差別をしないと信じている。そして、自分は非白人の友人・配偶者がいるといったポジティブな自己イメージを維持しながら、無意識のうちに偏見を持った態度をとったり、差別的な行動をとったりする (スー、2020; ディアンジェロ、2022)。自分はリベラルで進歩的だと自認する白人の人種差別に対する意識について論じたディアンジェロ (2022) は、白人自身が自らの立場を批判的に捉える必要があるとした上で、そのような白人が自らの差別について指摘されたときの反応について、以下のように述べている。

私たち白人は、自分が白人であることの立場性や、それが自分の経験をどのように形成しているかを批判的に考えなければ、センシティブな会話を進めていくスキルも、そうした会話の中で覚える不快感に耐える感情的な強さも身につかない。このことは特に自分自身の世界観や思い込み、言動が問われている場合に当てはまる。その結果が、白人の心の脆さ⁶⁾だ。黒人たちは、私たち白人のほとんどが自らの白人性に関する質問に答えられないこと、それができないまま議論の場に臨んでいることを分かっている。結果として、黒人が人種問題を提起した場合、苦痛が軽減されるどころか、よりいっそう増すことになる。これが白人の進歩主義者の大きな矛盾点の一つだ。一方では、非白人を傷つけるような言動は絶対にしたくないといいつつ、他方では、非白人を傷つける言動があったと指摘されると反発するのだ。(ディアンジェロ、2022: 40)

ディアンジェロ (2022: 48) は、白人ナショナリズムや非白人に対する明白な危害には対処する必要があるが、自分のことを白人ナショナリストとっていない「善意の」白人が実行してい

る、捉えにくい人種差別にも、あからさまな差別と同様に有害な蓄積効果があり、白人自身がその現状を認め、「よりソフトな」形態の人種差別と向き合う必要があるのだと主張している。

日本の状況に目をやると、日本では2016年にいわゆる「ヘイトスピーチ解消法」が制定されたものの、歴史的視点の欠如や、侮蔑的言動を直接的に違法とする規定がないことが問題視されている（佐藤、2017）。本法律の制定前から、特に在日コリアンに対するヘイトスピーチが行われ、それだけでなく外国人に対する差別、不当な扱いや嫌がらせが社会問題となってきた。さらに、コロナ禍の2020年には飲食店が「外国人お断り」といった貼り紙をしたり、保健所が外国人と食事をしないよう呼びかけるお知らせを配布したりしたほか、2021年8月には、京都府宇治市ウトロ地区で在日コリアンをターゲットとした放火事件も起こり、あからさまな差別事件が問題となった（後藤・鶴塚、2022；朝日新聞、2020；久保田・村山、2021）。人権教育啓発推進センター（2017）による調査では、外国人の約4割が「外国人であることを理由に入居を断られた」ことがある、約27%の人が「『外国人お断り』と書かれた物件を見たのであきらめた」ことがあると回答している。多様な背景を持つ人々が共に暮らす社会を目指す「多文化共生」の理想とは裏腹に、あからさまな差別だけでなく、わかりにくい差別も続いている。国籍や人種的背景に基づいた差別を指摘しても、「そんな人は気にする必要ない」「そんな風に怒っていたら誰も聞いてくれないよ」という一見「善良な」声掛けも、多様性を認めていることにはなっていない（金、2021；丸一2022）。

あらゆる形の差別に抵抗していくためには、このような不平等な関係について沈黙を守るのではなく、マジョリティの日本人が持つ特権性を批判的に捉え、抑圧構造を分析する必要がある。すべての人がこの構造の内側におり、そこから逃れることはできないのだ。反差別主義者になるために、ディアンジェロは「白人性を薄める」ことを提唱している。ディアンジェロ（2022：20）によれば、白人性を薄めるとは、「白人であることに基づいた抑圧的な態度や無知、また無知ゆえの傲慢さをなくし、レイシズムの指摘に対して自己防衛的にふるまったり、レイシズムに沈黙したり、加担したりしないこと」であり、「白人であることを入り口として他の白人と協力し、レイシズムに介入する」ことである。日本における差別に対しても、マジョリティである日本人は、日本人であることについて批判的意識を持ち、異なる背景を持つ人との関係を築くためのスキルを身につけ、差別に対して働きかけていくことによって「日本人性を薄める」必要がある。このような抑圧構造を捉える視点は社会正義のための教育とも共通しており、あらゆる差別に対して行動していくための知識とスキルを身につけていくうえで重要である。

3. マイクロアグレッションとは

3.1 マイクロアグレッションの定義

マイクロアグレッション（microaggression）は、「意図の有無にかかわらず、特定の人や集団を標的とし、人種、ジェンダー、性的指向、宗教を軽視したり侮辱したりするような」言動であり、日常のありふれた場面で起こりうるとされる（スー、2020：34）。回避的レイシズムに見られたようにマイクロアグレッションの行為者は自分が差別した、あるいはする可能性があると感じておらず、むしろ「善良な人」から発せられ、受け手ももやもやとした気持ちが残るものの、差別であると気づかないこともあるため、無意識な会話の中に紛れてしまうことが多い（金、2021）。「マイクロ」という言葉から、微細な、瑣末な、という意味にとられてしまうことがあるが、在日コリアンカウンセリング&コミュニティセンター（ZAC）の所長でマイクロアグレッションの調査・研究活動も行っている丸一（2022）によれば、マイクロアグレッションを「小さな攻撃」とする、

あるいは訳すことは本来の意味ではないという。ここで使われている「マイクロ」は、生態学的システム理論における「マクロ-マイクロ」の領域を表す概念であり、「マクロ」は国や社会のシステムを指すマクロ領域であるのに対し、「マイクロ」は家族や友人等により日常的な領域のことで、マイクロアグレッションは学校や会社、家族や友人等の関係における「『日常的な』侮辱や見下し」(丸一、2022:188)のことである。そして、そのような「日常の何気ない言動に影響を及ぼしているのは、マクロな差別構造や政治体制、制度であり、教育やメディアや文化」である(丸一、2022:188)ため、マイクロアグレッションはその影響下にいる者、つまり誰もがしてしまう可能性があるといえる。

3.2 マイクロアグレッションの分類

日常的に発生するマイクロアグレッションがどのように心身の健康に影響を及ぼすのかを研究したスー(2020:69-82)は、マイクロアグレッションを1) マイクロアサルト、2) マイクロインサルト、3) マイクロインバリデーションの3つ形式に分類している。マイクロアサルトは、意識的・意図的に相手に侮辱的な言動や差別的な行為等を通して傷つける行為であり、特定の属性の人に対してその集団に対する蔑称で呼んだり、その集団に対して行われてきた象徴的な差別行為(例えば反ユダヤ主義的な落書きをする、黒人奴隷のリンチに使われた絞首刑用の縄を吊るす等)をすることである。マイクロアサルトはほかの二つの形態に比べて直接的で露骨であり、意図が明確なため意図が明確でないマイクロインサルトやマイクロインバリデーションよりも対応しやすいとされる。

マイクロインサルトは、日常的なやり取りの中で特定の属性の人のアイデンティティを侮辱するもので、たいてい無意識になされる。これにはかすかな無視や、ステレオタイプや無礼な言葉で相手を貶める表現で表される。例えば、①相手の知的能力を人種等の属性や出自に帰する、②異文化の価値観やコミュニケーションスタイルを病的なものとして扱う、③犯罪者予備軍として決めてかかる、④二級市民として劣った存在とみなす、といった隠れたメッセージが含まれる。

マイクロインバリデーションは、特定のグループの人々の感情や経験的なリアリティ等は無視したり、否定したり、無価値なものとして扱ったりすることで、三つの分類の中で最もダメージが大きくなる可能性がある。その人のアイデンティティにかかわるリアリティを否定するものであるからである。マイクロインバリデーションの例として、①よそ者扱い(どこで生まれたかしつこく聞く等)、②肌の色や性的指向、ジェンダーを見ないふりをする(人種の違いによる差別を否認する等)、③個人の持つ人種差別主義・性差別主義・異性愛主義を否認する(自分は男性と女性を平等に扱うという等)、④能力信仰主義(すべてのグループは平等な機会を与えられており、成功は個人の努力によるものであると主張する等)をスーはあげている。マイクロインバリデーションもまた、無意識的に意図せず行われていることが多い。

無意識的になされるマイクロアグレッションが起こってしまう状況について、スー(2020:101)は、意図的ではないバイアスは、「傷つけようという意思よりも助けないという形で表れやすい」という。行為者は、特に曖昧な状況において、正しい行動と間違っている行動がはっきりしないときや、自分の行動にもっともらしい理由(弁明)があるときには、自らの意図的ではない差別には直面しなくて済む(スー、2020:101)。冒頭のケースでいえば、オンラインのグループディスカッションでお互いの顔が見えない状態(学生はこちらから指示しない限りカメラをオンにしない)、海外からのアクセスでインターネットの通信状況が常にいいとは限らないという「曖昧な状況」であり、「ほかの人が話しかけるかもしれない」あるいは「相手が話せない状態かもしれない」

という「弁明」をすることができた、ということが出来る。

当該留学生と一緒にグループだった学生は、「相互作用の力学」(スー、2020:368)が曖昧な状況において、この出来事がマイクロアグレッションであったことが指摘され、教師(という権力を持つ筆者)から攻撃されたと感じてしまったかもしれない。そして、誰もが持っている無意識の偏見とそれを生み出す社会的背景について、説明が十分にされないままであったため、なぜ無視することがマイクロアグレッションとして問題であったのかを理解できなかった可能性がある。また、教師である筆者自身も、十分に対応できたとはいえない。

マイクロアグレッションを克服するための「最初の一步」として、スー(2020:82-84)は次のことを提案している。まず、マイクロアグレッションを定義することだ。マイクロアグレッションは家族や職場、医療従事者・患者といった関係の中で、加害者が意識していないところで起きることが多いため、マイクロアグレッションが起こりうる多様な形態について知ることである。次に、マイクロアグレッションを認識することだ。つまり、マイクロアグレッションの場に居合わせたとき、また自分がマイクロアグレッションを伝える側になったときにその出来事について認識し、どのように行動するかを決める必要がある。三つ目に、マイクロアグレッションの隠された意味を分析することだ。マイクロアグレッションには自民族中心的な価値観や偏見、ステレオタイプが反映されている。また、その背景となっている不公平なシステムや抑圧的な構造を分析する必要がある。

3.3 マイクロアグレッションを受けた人への影響

マイクロアグレッションを受けた側はどのような反応になるのだろうか。スー(2020)によれば、マイクロアグレッションを受けたとき、相手の行動の真意を解釈しようとし、どんな行動をとるべきだったかを確認することに心理的エネルギーを費やしてしまうという。そして、マイクロアグレッションを受けた時の最もよくある反応は「何もしない」ことである。これは、①マイクロアグレッションが起きたのかどうか断定できない、②どう応答すればよいか分からない、③応答できる前に出来事が過ぎ去ってしまう、④経験した現実を否定し、何も起きていないと信じ込もうとする、⑤行動への無力感、⑥反応をした場合の結果を恐れる、ということが原因であると分析している(スー、2020:109-112)。実際に冒頭のケースでも、マイクロアグレッションを受けた留学生は、「どうして話しかけてくれないのか」と思っている間にディスカッションの時間が終わってしまったと語っていた。何が起きているのかを判断しようとしている間に出来事が過ぎ去ってしまったのである。

つまりマイクロアグレッションが起こった際、それを受けた人が加害者に直接指摘することは少ないが、心理的負担はかかってしまうことになる。マイクロアグレッションをした行為者には、自分は偏見はなく、差別をしないと信じて行動しているため、被害者がマイクロアグレッションだと受け取ったとしても、それをどのように気づかせるのか、という問題が生じる(金、2021)。マイクロアグレッションを指摘したところで、過剰反応だ、敏感すぎる、考えすぎだ、といわれ、被害者の経験は無化されてしまう可能性もある(金、2021)。

結局、多くの場合、マイクロアグレッションを受けた人が怒りやストレスを抱えたまま、何もしないということになる。しかしこれは自分の経験を否定することになり、潜在的に精神に害を与える(スー、2020;丸一、2022;金、2021)。マイクロアグレッションを日常的に受けることにより、慢性的なストレスをもたらす、心身の健康に影響を及ぼすことになる。加害者にとっては1回のマイクロアグレッションでも、マイノリティの人にとっては、何度も受けている場合が多いため、

「ヘイトスピーチやヘイトクライムと共鳴しあってその人の『リアリティ』を形成」(丸一、2022: 189) し、より深刻な負荷をかけることになる。マイクロアグレッションを訴えた際に不利益を被るかもしれないという不安感や、自尊心の低下等の心理的影響により、教育や雇用の機会へのアクセスが狭まることにもつながる(スー、2020; 金、2016; 金、2021)。

3.4 教育現場におけるマイクロアグレッション

教育現場、特に教室内で起こるマイクロアグレッションは、生徒・学生同士で起こることもある(スー、2020; Kim & Kim, 2010)。マジョリティの学生(例えば、アメリカの大学の白人学生)は、マイクロアグレッションをしてしまい、それを指摘されても、自分がしたことが(マイノリティの)学生を「不快にさせたということを漠然と感じとる」(スー、2020: 368) だけに終わってしまうことがある。

マジョリティの学生は、マイノリティの学生が日常的に経験している人種差別の問題を、その話題を避けることによって回避できるが、マイノリティの学生はその問題を避けるという選択肢は持たない(スー、2020)。一方、教師も、マイクロアグレッションが教室内で起きてしまったとき、教室のコントロールを失うことへの恐怖がある場合や、困難な話題(対話)において適切に対処したり、効果的に介入するための知識や教育戦略を持たない場合、マジョリティ学生の偏見を強化させてしまったり、マイノリティ学生に教室の状況が抑圧的であると感じさせてしまうことになる可能性がある(スー、2020)。

日本の文脈におけるマイクロアグレッションの研究は、丸一俊介、金友子らがメンバーとなっているマイクロアグレッション研究会が行ってきている。マイクロアグレッション研究会は、前出のZACのメンバー数名により設立された。在日コリアンの若者が経験するマイクロアグレッションについて、丸一(2022)や金(2016、2021)の論考でも紹介されている在日コリアン青年連合(KEY)による『在日コリアンへのヘイトスピーチとインターネット利用経験などに関する在日コリアン差別実態アンケート調査報告書』(2014)では、「差別未満」というカテゴリーを設けて調査されており、金(2016)はそれらを在日コリアンに対する不可視なマイクロアグレッションとして取り上げている。例えば、在日コリアンに対するヘイトスピーチの話をして「考えすぎだ」「気にしないほうがいい」等といわれ、理解されていないと感じた経験が紹介されている。そして金自身も、大学の担当授業で在日朝鮮人三世であると紹介しているのにもかかわらず、学生から「先生の日本語の上手さに感動しました」と言われたり、これまでの日常生活で「留学生ですか?」「日本人みたいに見えますね」等といわれたりしたと述べている(金、2021)。これらの発言には悪意はないものの、「あなたはよそ者」「日本には日本人しかいない」あるいは「日本人であることがよいことだ」という前提があり、それはヘイトスピーチに見られる「国へ帰れ」というあからさまな人種差別にあるメッセージに限りなく近いと金は指摘している(金、2021: 49)。

また、日本における「ハーフ」と呼ばれる人たちに対するマイクロアグレッションも実際に学生が加害、あるいは被害を経験しうることである。「ハーフ」「ミックス」と呼ばれる人々の経験を社会問題として捉えることの重要性について解説した下地(2021)による『「ハーフ」ってなんだろう? あなたとやりたいイメージと現実』には、「ハーフ」や「ミックス」と呼ばれる当事者の短いインタビューが取り上げられているが、そこには友人や周りの大人だけでなく、教師から英語ができると期待され、難しい問題に答えさせられたり、あるいはその逆に日本史や日本文化ですら知らないと思われたり、アフリカルーツであることを理由に部活の顧問に過度な期待をされたりしたエ

ピソードが語られている。その他に、「ハーフ」や「ミックス」の人がよく受けるマイクロアグレッションとして、「日本語が上手ですね」「日本人以上に日本人らしい」といったようなものや、社会的・歴史的に作られてきた黒人に対するステレオタイプが反映されている「スポーツが得意」や「ラップが得意」といったものだけでなく、本人の同意なしに髪の毛を触られるといったこと等が挙げられている（下地、2021）。そしてこのようなマイクロアグレッションやあからさまな差別（警察による執拗な職務質問、性的な嫌がらせ等を含む）により、精神的にも身体的にも支障をきたすことが示されている。

高等教育の現場では、冒頭に述べたように留学生に対するマイクロアグレッションも起こりうる。アメリカの大学に在籍する留学生に対するマイクロアグレッションについて調査したキムとキム（Kim & Kim, 2010）は、留学生が受けるマイクロアグレッションとして以下のものを上げた。①言葉に訛りがある、あるいは授業内で発言しないために知性がないと思われる、もしくは授業に貢献していないと思われる、②留学生の文化的価値やコミュニケーションスタイルを病的なものとする（積極性に欠けると判断される）、③国際問題や留学生の観点を無価値化する、④すべての留学生は同じだと考える、⑤アメリカ国内のポップカルチャーやジョーク等をディスカッションで言及し留学生に説明しない、⑥グループワークで留学生の意見を無視したり、教師は留学生を授業で指名しない、廊下や教室内で無視する、⑦留学生を対象とした支援の欠如、等である。留学生の出自に関して貶める発言をすることといった分かりやすい差別だけでなく、認識されにくいものがあるのが特徴的である。本授業で起きたのは⑥のマイクロアグレッションに近いと考えられる。

日本の大学に在籍する留学生に対するマイクロアグレッションの研究は少ないが、中国人留学生がアルバイトで体験するマイクロアグレッションについての研究がある（劉・石黒、2022）。劉・石黒（2022）の研究によると、外国人だからという理由で「日本人のスタッフを呼んでくれ」と言われたケースや、名札を見て中国人であることが分かると他の店員に聞くケース、接客の仕事に任されずに洗い場の仕事しか任されないケース、店で何かミスがあるとまず疑われるケース等があったことが分かった。劉・石黒は、これらは日本人客や雇用主・同僚にとっては留学生との接触は日常生活のほんの一部であるかもしれないが、このような言動が留学生を傷つけているという事実を認識していない可能性を指摘している。

マイクロアグレッションが授業内で起きないようにする、また自分自身がマイクロアグレッションの行為者とならないために、教師は、マイクロアグレッションについての理解を深め、自らの偏見に自覚的になる必要がある。また、学生自身にも困難な状況（マイクロアグレッション）について、個人的に振り返る時間を与え、学生に聞き取ったり、互いの振り返りを共有したりする等といった働きかけをスー（2020）は提案している。留学生に限らず、多様な背景を持つ学生が学ぶ、あるいは生活する場におけるマイクロアグレッションが起こった時は、スー（2020）が指摘したように偏見や固定観念を軽減させ、他者に対する共感を増進するための機会でもある。むしろ、マイクロアグレッションを起こしてしまわないようにすること、そしてマイクロアグレッションが起こったときにより適切な対応ができるようになることが望ましい。そのためには、自らの偏見や特権性に自覚的になり、マイクロアグレッションを起こさない、あるいは起こさせないための知識やスキル、態度を身に付ける必要がある。具体的には、自らの立場や日本の現状等について批判的に捉えることができる批判的思考力、異なる背景を持つ他者に耳を傾ける傾聴力、相手の文化を理解し自らの文化と関連付ける異文化理解力、様々な視点から多文化共生について考え、自分の意見を述べる表現力、マイクロアグレッションを含む様々な形の差別に対して、異なる背景を持つ他者と

協働して働きかけていこうとする態度等があげられるが、第5節の授業開発ではこのようなスキルや態度を身につけることを目指すものとした。

4. 授業科目「多文化共生」の概要とこれまでの課題

「多文化共生」は筆者が担当している基盤教育科目で、全学部の1年生以上を対象とし、第3クォーターは工学部・農学部、第4クォーターは人文社会学部・教育学部・理学部が対象となっている全8回の授業である。主な履修生は1年生だが、2～4年生が履修することもある。2016年度後期から実施しているが、昨年度の受講生数名にインタビューを行ったところ、受講理由は様々で、多文化共生そのものに興味があった、差別や偏見のことを知りたかった、国際的なことや国際交流をイメージして受講したというものであった。2021年度の授業概要、目標と授業内容を表1に示した。

これまでこの授業では、第2回にステレオタイプや偏見について取り上げ、第3回にアメリカにおける人種差別について焦点を当てて授業を行っていた。そして第4回に日本に舞台を移し、日

表1 「多文化共生」の概要・目標と授業内容 (2021年度)

概要	多文化社会日本の現状と課題を、様々な視点から考察することを通して、多文化共生について理解を深める。また、日本人性の視点や多文化教育の視点、社会正義のための教育の視点、グローバルな視点から多文化共生について考え、多文化共生のための取り組みや実践についての理解を深めるとともに、授業内外での活動を通して、多文化共生社会に向けての資質の基礎を養う。		
目標	多文化社会日本の現状と課題を様々な側面から理解し、説明することができる。 グローバルな視点から見た多文化共生について考えを深めることができる。		
	授業内容 (テーマ)	主な活動	鍵概念
	1. オリエンテーション、アイデンティティについて考える	多様な背景を持つ人々のアイデンティティについてディスカッションする	アイデンティティ
	2. 「文化」について考える—批判的分析の視点—	〇〇国のイメージについて話し合う 動画を視聴してステレオタイプの具体例について考える	ステレオタイプ、偏見、文化相対主義 第4クォーター：マイクロアグレッション
	3. アメリカにおける人種差別と多文化教育	動画を視聴して構造的差別について考える	人種差別、構造的 人種差別、マイクロアグレッション、多文化教育
	4. 「日本人性」とは一立場の特権性から社会をみる—	動画を視聴して特権性について考える 日本人の特権性の例を考える	特権性、日本人性
	5. 海外につながる子どもたちと多文化共生教育	まんが「クラスメートは外国人」を読んで外国人児童生徒の経験についてディスカッションする	外国人児童生徒教育、生活言語と学習言語
	6. 地域における多文化共生の取り組み	やさしい日本語の必要性について学んでやさしい日本語に直す活動をする	多文化共生、やさしい日本語
	7. グローバルな視点から見た多文化共生	「ちがいのちがいの」の活動を通して公正や人権について学ぶ	グローバル化、公正、人権
	8. アクションプランを考えよう—多文化共生社会の実現に向けて	「外国人の悩み」の資料を読んでアクションプランを考える	多文化共生、人権
評価基準	多文化共生について、授業で取り上げた基本的な知識と考え方を理解し、自分の考えを述べることができたか。 多文化共生社会の実現に向けて、アクションプランを作成することができたか。		

本において差別をしてしまう側である日本人の特権性について学ぶ。マイクロアグレッションについては、ステレオタイプや偏見に基づく差別の形態の一つとして、第3回で紹介していた。マイクロアグレッションの例として、「(20～30代の人に)『結婚は？お子さんは？』と聞く」、「(レストランで郭という名札を付けた人に)『日本語上手ですね』という」、「『ハーフって、かわいくて、英語も話せていいですよ』という」といった文を見せ、何が問題かを考えた後、マイクロアグレッションについての解説をしていた。

しかし、2021年度第4クォーターでは冒頭のように初回の授業でマイクロアグレッションが起きてしまったため、第2回の授業でマイクロアグレッションについての説明を取り入れた。また、第2回の授業後の学生の反応としては、授業後に任意の学生にインタビューしたところ、「授業でマイクロアグレッションが起こったことに驚いた」というものがみられた。しかし、このマイクロアグレッションが起こったことの社会的背景の分析まで授業で取り扱うことができず、身近に起こりうる差別について深く理解できたわけではない。そのため、全体的にマイクロアグレッションを意識した授業を行う必要があるが、本稿では特に、差別について取り扱う第2回～第4回の授業開発を行うこととした。

次節では授業開発の背景として、マイクロアグレッションを扱った教材、および関連するテーマである日本人の特権性の尺度についての研究を検討したうえで、本授業におけるマイクロアグレッションの授業計画を提示する。

5. マイクロアグレッションの視点を入れた「多文化共生」の授業開発

5.1 授業開発の背景

マイクロアグレッションを取り扱ったワークブックとして、渋谷(2018:50-55)がある。この実践では「ウォーミングアップ」でマイクロアグレッションの具体的な例として、外国人に対して言った、もしくは言いたくなかったことがある文と、外国(アメリカに留学しているとき)で自分が言われて「いやではないがなにかひっかかる」「いやな気持ちや差別を感じる」かもしれない文について考える。例えば、外国人に対する例として「箸の使い方が上手ですね」、海外で自分が言われる例として「ハンバーガーを食べたことがありますか？」等の文を五つずつそれぞれ考える。これは、日本にいるマジョリティに属する日本人が外国人に対してしてしまいがちなマイクロアグレッションを反転させ、自分が言われた場合にはどう感じるかを考える活動になっている。その後、マイクロアグレッションの解説として、「明らかに差別・偏見ではないけれど、そうともとれる微妙な言動」という説明がなされ、外国人に対してレストランで英語のメニューやフォークを渡したり、「○○ちゃんはハーフだよ。お母さんが外国人でしょう？」ということによって、「あなたはわたしたちとは違う」(渋谷、2018:52、強調原文)という隠れたメッセージを送っていると説明している。またここでは、年齢や性別に対するマイクロアグレッションとして「女性なのに結婚をせず、仕事を選んだんですね」といった例も挙げられている。マイクロアグレッションの問題点として、発言者に差別の意図がないため、問題点を指摘されても気づかないこと、そして同じ発言をされても、気になる人と気にならない人がいること、そして発言を受けた人がもし少し引っかかったとしても、自分の気にしすぎかもしれないと考え、指摘できないままになることであるとしている。さらに、「本当に悪意のない発言からむりやり悪意を感じ取ろうとする人」もいるため、相手の思いやりから出た言動でも届かなくなってしまう(渋谷、2018:55)としている。

しかし、マジョリティにとっては、「同じ発言でも気になる人と気にならない人がいる」という

点や、「むりやり悪意を感じ取ろうとする」という指摘は、マイクロアグレッションが扱づらい、あるいは受け手にとって反応が違うのだから、マイクロアグレッションをしてしまっても仕方がない、責めないでほしい、ということになり、マジョリティ性の持つ自己を批判的に見ることを避けてしまうことにならないだろうか。違う例を挙げて金 (2021: 50) は「人に出自を聞いたら、それはマイクロアグレッションなのだろうか。そうとも言えるし、そうでないとも言える。言動は文脈の中にあり、その中で解釈され意味付けされる」と説明している。相手の「思いやり」や「善意」から出た言動でも、その背景に「隠されたメッセージ」が含まれているのであれば、そのような言動がどうして起こってしまうのかを批判的に分析する必要があるだろう。

また、マイクロアグレッションが特権性に無自覚なマジョリティによってなされることも多いことから、マイノリティが経験する差別やマイクロアグレッションを知ることにより、特権性に自覚的になることが考えられる。授業計画では、出口・渋谷 (2021) が開発した日本人の特権性の尺度を参考にした。出口・渋谷は、日本では「特権」という概念がまだ日本社会に浸透していないことから、マッキントッシュ (McIntosh, 1989: 2011) 白人の特権性のリストを参考に、「特権」という言葉を使わずに「日本人特権尺度」を開発した。これまでの筆者の授業でも、特権性の意味や第2節で取り上げたマッキントッシュ (1989: 2011) の日常で経験する白人の特権性の例を消化したうえで「日本人にはどんな特権があると思うか」という質問をしても、それまで意識したことがないことについて議論を深めることは難しかったため、あらかじめ例を示し、話し合うこととした。

以下の目標と授業計画は、2021年度の内容を基に、マイクロアグレッションにかかわる活動を加えていく形とし、特に差別とマイクロアグレッションに関連する第2回～4回の授業計画を作成した。ただし、第1回はマイクロアグレッションには触れないものの、授業内でマイクロアグレッションが起きないようにするためのグラウンド・ルールを設定することとした。授業時間はそれぞれ90分である。

5.2 グラウンド・ルール (第1回)

マイクロアグレッションについて考えるために、まずマイクロアグレッションが起きないような環境にするためのグラウンドルール (基本原則) を設定する。これは、すべての学生が安心して授業で自分の意見を言うことができ、ほかの人の意見を尊重し、クラスで学んでいくための場づくりとして行う。ここでは教育における公正や正義の研究者であるポール・C・ゴースキ (Paul C. Gorski) による Multicultural Pavilion に記載されているグラウンド・ルール、およびミシガン大学学習教育研究センター (Center for Research on Learning and Teaching, University of Michigan) によるディスカッションの際のグラウンド・ルールを参考に、次のことを学生に提示する⁷⁾。

1. 他の人が話しているときは聞くことに専念し、相手を尊重する。
2. ディスカッションでは、全員が発言できるようにする。
3. 他の人を傷つける発言や行動はしない。
4. 相手のアイデンティティや属性について決めつけた発言はしない。
5. ディスカッションは、お互いの意見から学び合う機会でもあるため、相手の意見に感想を述べたり、質問したりしてみる。

上記のうち、4については2022年度第3クォーター以降に加えたものである。というのも、

2022年度第3クォーターの第1回目の授業（オンライン）で上記のグラウンド・ルールを示したにもかかわらず、再びマイクロアグレッションにつながる発言をした学生がいたことが報告されたためである。そのため、第2回目では、具体的な例を挙げてマイクロアグレッションを起こさないための注意をしたほか、本授業で学ぶ差別につて、実際のケースを取り扱うため、差別表現が含まれる場合があることについて注意喚起した。

このように、グラウンド・ルールは、授業を受ける人が誰であるか、差別や多文化共生等についての学習歴や理解の程度によって、変更したり、追加したりする必要がある。また、授業の途中で再度学生に理解を促したり、状況によって変更したりすることも考えられる。

5.3 ステレオタイプ、偏見、差別とマイクロアグレッションの授業開発（第2回～第4回）

第2回～第3回は、文化、ステレオタイプ、偏見、差別等について取り上げ、第4回では特権性について取り上げる。また学生は、グループディスカッションのテーマについて、事前課題とし

表2 第2回～第4回の授業目標と授業計画

第2回「文化」について考える一批判的分析の視点一		
授業目標 ・文化とは何かについて理解できる。 ・ステレオタイプがどのように形成されるかについて考えることができる。 ・ステレオタイプから生まれるマイクロアグレッションについて理解することができる。		
過程	○学習内容・学習活動	・指導上の留意点 <資料>
導入	○日本・日本文化のイメージ ・日本・日本文化と聞いて思い浮かべることをグループで話し合ったあと、全体で共有する。	・事前にディスカッションで話し合う内容について課題としておき、書いてきた内容について話す。
展開1	○「文化の冰山モデル」 ・「文化の冰山モデル」を使って、見える文化・見えない文化について理解する。 ・アメリカ、インド、韓国のイメージについて話し合う。	<資料>文化の冰山モデルは、原沢（2013）を参考に示す。 ・自分があまり知らない国の場合には「見える文化」が多くあげられることを確認する。
展開2	○ステレオタイプと偏見について ・アメリカ／日本のステレオタイプ的な写真を見て、ステレオタイプの定義について確認する。 ・ステレオタイプ的な写真を見て、ステレオタイプはだれでも持ってしまふことを理解する。 ・偏見はステレオタイプ的な見方に否定的な感情が加わったもので、特定の集団に対して根拠もないのに怒り、恐れ、嫌悪といった感情を持つことを確認する。	<資料>ステレオタイプ的な写真：アメリカの食べ物、欧米圏における日本人の表象、日本における白人や黒人の表象を紹介する。
展開3	○ステレオタイプが強化されたとき ・ステレオタイプが強化されたときに起こりそうな行動についてディスカッションを行う。 ・マイクロアグレッションについて理解する。	<資料> ・ステレオタイプから生じる身近なトラブルを題材として示す。 ・「ハーフ」や「ミックス」の人に対するマイクロアグレッションについて、下地（2021）を参考に示す。
第3回：アメリカにおける人種差別と多文化教育		
授業目標 ・様々な形態の差別について理解することができる。 ・マイクロアグレッションが起こる背景や、それが起こった時にどのように行動するかについて考えることができる。		

過程	○学習内容・学習活動	・指導上の留意点 <資料>
<p>導入</p> <p>展開1</p> <p>展開2</p> <p>展開3</p>	<p>○差別にはどんなものがあるか</p> <p>・グループディスカッションで以下のことについて話し合う。</p> <p>➢ 知っている差別にはどんなものがあるか</p> <p>➢ どのようなときに人種差別が起こるか</p> <p>・差別の形態（個人間での差別、制度的差別、文化的差別）について理解する。</p> <p>○人種的マイクロアグレッション</p> <p>・ケースを読んで、どうしてマイクロアグレッションが起こったか、自分ならどうするかについてグループで話し合う。</p> <p>ケースの内容</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>H大学の田中先生の授業では、グループディスカッションがあります。留学生のサミさんがいるグループで、他の日本人学生は、サミさんだけ話しかけず、意見を聞かないことがありました。</p> <p>1. あなたがサミさんだったら、どう思うでしょうか。</p> <p>2. 日本人学生は、どうしてサミさんに話しかけなかったと思いますか。</p> <p>3. もし、あなたがこのグループにいたら、どうすると思いますか。</p> </div> <p>○アメリカの人種差別の歴史</p> <p>・アメリカの人種差別の歴史を概観し、さらに構造的差別がどのように続いてきたかについて、動画を見て理解する。</p> <p>・Black Lives Matter 運動について紹介する。</p> <p>○アメリカにおける多文化教育</p> <p>アメリカにおける多文化教育の背景と、多文化教育の段階について理解する。</p> <p>多様な背景を持つ子どもに合わせた教材や児童文学を紹介する。</p>	<p>・事前にディスカッションで話し合う内容について課題としておき、書いてきた内容について話す。</p> <p>・人種や人種差別についての定義も説明する。</p> <p>・実際に学生が経験するかもしれないことについて、自分ならどうするかについて話し合う。また、マイクロアグレッションが起きてしまった背景を考えるように促す。</p> <p><資料>構造的な人種差別についての動画 URL : https://youtu.be/YrHIQIO_bdQ</p> <p><資料>様々な肌の色のトーンがあるクレヨン、色鉛筆の写真、日本の「パールオレンジ」のクレヨン等を示す。</p> <p><資料>アメリカン・インディアン、メキシコ系アメリカ人、日系アメリカ人、アフリカ系アメリカ人、ミックス・レイス (mixed race)、同性愛者を親に持つ子ども等を主人公にした児童文学の写真を紹介する。</p>
<p>第4回：「日本人性」とは一立場の特権性から社会をみるー</p>		
<p>授業目標</p> <p>・マジョリティとマイノリティの関係性について理解することができる。</p> <p>・日本人の特権性について理解し、日本人が経験する日常の特権性について考えることができる。</p> <p>・マイノリティの経験について理解し、マイクロアグレッションが起きないようにするための方法についてグループで考え、様々な手段で表現することができる。</p> <p>・アメリカの多文化教育の歴史と現状について理解することができる。</p>		
過程	○学習内容・学習活動	・指導上の留意点 <資料>
<p>導入</p> <p>展開1</p>	<p>○マジョリティとマイノリティ</p> <p>・社会的により優位な立場に立つマジョリティと、より権力から遠い立場であるマイノリティについて理解する。</p> <p>・社会的カテゴリーごとにマジョリティ・マイノリティがあることを理解し、自分がどの立場化を確認する。</p> <p>・マジョリティとマイノリティの体験がどのように違うかについて、グループで話し合う。</p> <p>○白人性について</p> <p>・ホワイトネス研究について理解する。</p> <p>・白人の特権性、また白人の特権としてどのようなものがあるかについて理解する。</p>	<p>・紹介する社会的カテゴリーは、人種・民族、出生時に割り当てられた性別、性自認、性的指向、学歴、経済的階級、障害の有無、言語であるが、他にも宗教や年齢等、様々な社会的カテゴリーがあることを説明する。</p> <p>・一人の人が社会的カテゴリーによってマジョリティ・マイノリティ両方に属する可能性があること、またそのアイデンティティも固定されたものではないことを説明する。</p> <p><資料>白人の特権性については、松尾(2005)、出口(2021)、およびMcIntosh(1988:2011)らによる白人性の定義や説明を参考にする。</p>

<p>展開 2</p>	<p>○特権性について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教室の前に置かれたごみ箱に、座っているところから紙を丸めて投げるアクティビティを行う。 ・マジョリティに属する人は自分の特権について無自覚であることについて理解する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・前に置かれたごみ箱は特権性そのものを意味し、座っている席は特権までのアクセスを意味する。当然、前にいる人のほうがごみ箱に入れやすいが、後ろに座っている人が紙を入れられないことは「努力が足りない」とみなされる、ということ意味する。前の人は後ろに座っている人の状況はわからないため、特権性に無自覚であることが分かるアクティビティである⁸⁾。
<p>展開 3</p>	<p>○マイクロアグレッションの例から日本人の特権性を考える</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日本に住んでいるマイノリティの人が受けるマイクロアグレッションの例を見て、自分に当てはまるかどうかを考えたのち、どうしてマイクロアグレッションになるのかについてグループで話し合う。 ・差別およびマイクロアグレッションの項目について、以下の例を見て、マイノリティであれば経験があるかもしれないが、マジョリティの日本人はほとんど経験しないことを確認する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <ul style="list-style-type: none"> ・駅を歩いていたら、身分証明書を見せてくださいと言われた。 ・アパートの契約をするとき、国籍を理由に契約を拒否された。 ・結婚するとき、相手の家族に出身や出自が理由で反対された。 ・自分の国や言語・文化について学校で教わることを保証されていない。 ・生まれたときから日本に住んでいるが「日本語が上手ですね」といわれる。 ・自分の性格や得意なことについて「○○人だから」といわれる。 ・レストランや空港等で失礼な扱いを受けたとき、自分が外国人だからかもしれないと考えてしまう。 </div> <ul style="list-style-type: none"> ・上記の項目について、マイクロアグレッション（マイクロインサルトやマイクロインバリデーション）の「隠されたメッセージ」を提示し、どれにあたるかについて話し合う。 	<p><資料>出口・渋谷（2021）による日本人の特権性の尺度として挙げられた6つのカテゴリー（法的権利、社会参加、教育、文化・言語・アイデンティティ、真正性、差別）における特権を参考に、項目を作成した。例えば法的権利の特権の例として、「私はパスポートなどの身分証明書を持ち歩かなくても問題になることがない」（出口・渋谷、2021: 109）があるが、それを反転させて項目を作成した。</p>
<p>まとめ</p>	<p>○マイクロアグレッションが起きないために何ができるか</p> <ul style="list-style-type: none"> ・グループでマイクロアグレッションが起きないようにするためにどうすればよいかについて話し合う。 ・授業のグラウンド・ルールについて、具体的な場面や状況を考えて、見直しを行う。 ・マイクロアグレッションが起こらないようするための方法についてグループで考え、様々な手段（ポスター、スキット、まんが等）で表現し、発表する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・マジョリティとして、マイクロアグレッションやあからさまな差別の言動に介入するための方法を紹介する。 ・マイクロアグレッションを含む差別は社会的な構造も含めて考えていく必要があることを説明する。

て授業前に提出することになっている。授業後には学んだことや疑問について記入し提出する。第2回から4回までの各回の授業目標及び授業展開について、表2にまとめた。

6. まとめ

マイクロアグレッションについて、筆者が担当していた授業では当初、わかりにくい差別の形態の一つとして、実際に学生が体験したり、あるいは自分が行為者になるかもしれない例を挙げつつ紹介していた。しかし実際に自分の授業でマイクロアグレッションが起こってしまったことをきっかけに、本稿でマイクロアグレッションについて考える授業の実践開発を試みた。筆者の授業を受ける学生は、留学生や、海外にルーツを持つ学生が受講することがあるが、ほとんどの学生は日本生まれ・日本育ちの日本人学生である。そのため、マイクロアグレッションが起きても気づかない可能性がある。

スー (2020) が示したように、マイクロアグレッションを起こさないようにするために、まずマイクロアグレッションの多様な形態について知り、そしてマイクロアグレッションに遭遇した時にどのような行動をとるべきかを考えることが重要である。本稿では、ケースを読んで、自分ならどうするかを考える活動を取り入れた。また、マイクロアグレッションに隠されたメッセージについて分析するために、動画や、日本人性尺度の例からどのような隠されたメッセージがあるかについて分析する活動を行うこととした。しかしながら、マイクロアグレッションを受けた場合の行動や、身近に差別が起こった場合の行動については具体的に含めることができなかつたため、今後の課題としたい。

また、マイクロアグレッションはいうまでもなく性的マイノリティの学生や合理的配慮を要する学生等も受けてしまう可能性がある。しかしながら本稿では十分に検討ができなかつたため、今後はあらゆる形態のマイクロアグレッションを含む差別についても取り上げた授業開発が必要である。

付記

本研究は、日本学術振興会学術研究助成基金助成金基盤研究 (C) (課題番号：19K02470, 研究代表者 青木香代子) の助成によるものである。

注

- 1) 具体的には、八島・久保田 (2012: 160) による「アイデンティティ・トーク」を参考に、ロシアと日本をルーツに持つ人と、朝鮮半島をルーツに持つ在日コリアンの人のアイデンティティの話をもとにして、国籍、文化、言語から見たそれぞれのアイデンティティについて考えるというものである。
- 2) 本稿では social justice education にあたる表現を「社会正義のための教育」としている。文献によっては「社会的公正教育」(グッドマン、2017; 出口、2021) があるが、「公正」は justice と近い概念である equity の訳としてもつかわれるため、ここでは「正義」を用いている。
- 3) 本稿では、人種とは社会的に構築されてきた概念であり、「人間の身体の差異を参照することによって社会的葛藤と利害関係を示し、象徴する」としたオミとワイナント (Omi & Winant, 2015: 110) の立場をとる。
- 4) 1990年に「ヘイトクライム統計法 (Hate Crime Statistics Act)」が連邦政府により制定された後、各州でヘイトクライム規制法が立法された (新、2015)。コロナ禍の影響によりアジア系アメリカ人をターゲットとしたヘイトクライムが急増したことを受け、2021年4月にはアジア系に対するヘイトクライムを防止する法案が提出され、可決された。
- 5) 本稿では、社会的に構築されてきた概念である「人種」に基づく差別を人種差別 (racism) としているが、引用部分では「レイシズム」を用いる。
- 6) 白人の心の脆さ (ホワイト・フラジリティ) とは、ロビン・ディアンジェロ (2021) によって概念化されたも

のである。ディアンジェロは、白人が人種差別と自分自身の白人性を結び付けられそうになると怒り、恐れ、罪悪感といった感情や、論争から撤退し沈黙するといった様々な自己防衛反応を起こすことに着目し、人種ヒエラルキーの中で白人としての優位性を保つことによって心の平静さを取り戻そうとする反応を「白人の心の脆さ」と呼んだ。フラジリティは脆弱性とも訳されるが、これは「弱さ」ではなく、人種上の支配と白人の特権を守るための強力な手段である（ディアンジェロ、2021：14）。

- 7) グラウンド・ルールは以下を参考にした。Multicultural Pavilion, Guide for Setting Ground Rules : <http://www.edchange.org/multicultural/activities/groundrules.html> ; ミシガン大学学習・教育研究センター Guidelines For Classroom Interactions : <https://crlt.umich.edu/examples-discussion-guidelines>. いずれも最終閲覧日 2022年9月23日。
- 8) 特権性について理解するためのごみ箱を使ったアクティビティは、青木（2020）、渋谷（2021）でも紹介されている。

引用文献

- 青木香代子（2020）「大学における社会正義のための教育に向けた試み—特権性と抑圧の理解の授業実践を通して—」『異文化間教育』52、102-119頁。
- 朝日新聞（2020）「店に「コロナにつき外国人お断り」の貼り紙 許される？」<https://www.asahi.com/articles/ASN625RXVN4WUTIL020.html>（最終閲覧日：2022年9月14日）
- 新恵里（2015）「アメリカ合衆国におけるヘイトクライム規制法（Hate Crime Law）の動向と、日本の課題」『産大法学』48巻1・2号、368-355頁、京都産業大学法学会。
- 金友子（2021）「日常をとりまくレイシズム」清原悠編『レイシズムを考える』29-52頁、共和国。
- 金友子（2016）「マイクロアグレッション概念の射程」堀江有里・山口真紀・大谷通高編『〈抵抗〉としてのフェミニズム』生存学研究センター報告書24、105-123頁。
- 久保田一道・村山恵二（2021）「感染対策文書に『外国人と食事しないで』保健所が撤回」朝日新聞 <https://www.asahi.com/articles/ASP5Q5S0WP5QUJHB00G.html>（最終閲覧日：2022年9月14日）
- 公益財団法人 人権教育啓発推進センター（2017）『平成28年度 法務省委託調査研究事業 外国人住民調査報告書—訂正版—』<https://www.moj.go.jp/content/001226182.pdf>（最終閲覧日：2022年9月14日）
- 後藤由耶・鶴塚健（2022）「デマ信じ在日コリアン標的 被告がもたらした『恐怖』 ウトロ放火」毎日新聞 <https://mainichi.jp/articles/20220509/k00/00m/040/111000c>（最終閲覧日：2022年9月14日）
- 渋谷実希（2018）「悪気はなかったんだけど…—マイクロアグレッション—」有田佳代子・志賀玲子・渋谷実希（編著）『多文化社会で多様性を考えるワークブック』50-55頁、研究社。
- 渋谷恵（2021）「特権を意識する—日本の大学における授業実践を通して—」坂本光代（編）『多様性を再考する—マジョリティに向けた多文化教育』90-103頁、上智大学出版。
- 下地ローレンス吉孝（2021）『「ハーフ」ってなんだろう？—あなたと考えたいイメージと現実—』平凡社。
- スー、デラルド・ウィン（マイクロアグレッション研究会訳）（2020）『日常生活に埋め込まれたマイクロアグレッション—人種、ジェンダー、性的指向：マイノリティに向けられる無意識の差別』明石書店。
- 在日コリアン青年連合（2014）『在日コリアンへのヘイトスピーチとインターネット経験などに関する在日コリアン青年差別実態アンケート調査報告書』在日コリアン青年連合（KEY）。
- 佐藤潤一（2017）「ヘイトスピーチ規制の法的問題点 憲法と国際人権法の視点から」ヒューライツ大阪 <https://www.hurights.or.jp/archives/newsletter/section4/2017/05/post-13.html>（最終閲覧日：2022年9月14日）
- ディアンジェロ、ロビン（貴堂嘉之監訳・上田勢子訳）（2021）『ホワイト・フラジリティ—私たちはなぜレイシズムに向き合えないのか？—』明石書店。
- ディアンジェロ、ロビン（出口真紀子監訳・甘糟智子訳）（2022）『ナイス・レイシズム—なぜリベラルなあなたが差別するのか？—』明石書店。
- 出口真紀子（2021）『「特権」の概念—北米社会と白人特権の考察』坂本光代（編）『多様性を再考する—マジョリティに向けた多文化教育』73-89頁、上智大学出版。
- 出口真紀子・渋谷恵（2021）「日本人の特権を可視化するための尺度の開発」坂本光代（編）『多様性を再考する—マジョリティに向けた多文化教育』104-119頁、上智大学出版。
- 原沢伊都夫（2013）『グローバル時代を生きるための異文化理解入門』研究社。
- 松尾知明（2005）『「ホワイトネス研究」と『日本人性』：異文化間教育への新しい視座』『異文化間教育』22、15-26頁、アカデミア出版会。
- 丸一俊介（2022）「心理支援の現場から見るマイクロアグレッション—在日コリアンカウンセリング&コミュニティセンターの歩みから—」『現代思想』第50巻第5号、186-194頁、青土社。
- 八島智子・久保田真弓（2012）『異文化コミュニケーション—グローバル・マインドとローカル・アフェクト』松柏社。
- 劉薇・石黒武人（2022）「在日中国人留学生のライフストーリー—に見る無意識の差別—マイクロアグレッションという視点から—」武蔵野大学グローバルスタディーズ研究所, *Global studies*. 6, 95-113頁。

- Bell, L. A. (2016). Theoretical foundations for social justice education. In M. Adams, L. A. Bell, D. J. Goodman, and K. Y. Joshi (Eds.), *Teaching for diversity and social justice* (3rd ed., pp.3-26). New York: Routledge.
- Kim, S. & Kim, R. H. (2010). Microaggressions experienced by international students attending U.S. Institutions of higher education. In D. W. Sue (Ed.), *Microaggressions and marginality: Manifestation, dynamics, and impact* (pp. 171-191). Hoboken, NJ: John Wiley & Sons, Inc.
- McIntosh, P. (2011). White privilege: Unpacking the invisible knapsack. In P. S. Rothenberg. (Ed.). *White privilege: Essential readings on the other side of racism* (4 th ed., pp.121-125). New York: Worth Publishers. (Original work published 1989)
- Omi, M. & Winant, H. (2015). *Racial formation in the United States*. 3rd ed. New York: Routledge.